

審査員総評

天野 太郎 (東京オペラシティアートギャラリー チーフ・キュレーター)

本助成プログラムは、他のアーティスト・イン・レジデンス事業と異なる点、つまり、幾つかの地域拠点が用意され、「横浜の風土、歴史、文化を調べることや、滞在を通じて人々と会話を交わし、交流すること」を大きな趣旨として持っているが、前回も感じたが、この特徴を活かす提案が少なかったことが残念だった。それを前提に言えば、事前の横浜それ自体の歴史的、文化的な文脈への理解やリサーチも少なかったと思われる。決して大きい国土を持たない日本だが、それぞれの都道府県市町村が持つ特徴の多様性は特筆されると思われ、そういった中で、改めて横浜をどう捉えるかは重要な案件だろう。更に言えば、そういったリサーチは、明治以降、つまり近代以降に限らず、むしろ近代以前の歴史的な文脈への眼差しも望まれる。こうした点を強調するのは、それぞれのアーティストの提案書に記載されて考え方が、実は思いの外、自身が了解していない事象と有機的な繋がりを喚起させるからだ。

面談選考でも、こうした懸念材料をもとに、どれだけ作品制作とそれぞれの拠点の地域的な、また歴史的な特徴が繋がり得るか、その可能性を念頭に行った。実際には、こちらからの地域コミュニティへの繋がり方については、一緒にワークショップを行うというのは多くのアーティスト側からの答えだったが、これも、どういったワークショップの内容なのか、そこまでは深く構想されていなかったのが実情だった。とは言え、単に作品制作に直接関わるワークショップだけでなく、一緒に地域探訪するとか幾つかの提案があったのは良かった点だと思われる。今後は、こうした懸念点あるいは本事業の趣旨の周知を事務局から発信するのも必要と思われる。

最後になったが、拠点は出来るだけ多く設定するか、あるいは、敢えて西区や中区といった中心都市部を外すのも案としてあり得るだろうと思われる。地域コミュニティとの新たな関係性の構築もこのプロジェクトの主眼でもあるからだ。

野上 絹代 (振付家・演出家、多摩美術大学美術学部演劇舞踊デザイン学科専任講師)

今年度で審査員となって3回目の審査。応募総数 126 名の書類全てに目を通し自身の評価基準を制定していくのは昨年度にも増して困難であった。

私がこの助成に関わる意義としては「舞台芸術」分野の応募者を正しく評価し、面談選考のテーブルに乗せることだと自覚している。そして毎年それを強く意識して点数をつけているが、なかなか舞台芸術界での実績が書類に表れないのがもどかしい。とはいえ、年々助成の意義を理解して応募してくださっている方は増えているように感じ、このフェローシップ助成の周知が少しずつ行き届いているのを喜ばしく思う。

こちらの助成の目的は端的に言って《レジデンス→リサーチ・地域交流→それを活かした新たなキャリア形成》なのであって「舞台」の外に活動の重さがあるのだから、もしかすると分野で分けること自体が不利でありナンセンスなのかもしれない（とはいえ、データとしては出自分野を知りたいところではあるが）。実際に毎年、舞台芸術分野で活躍している方が美術分野で応募してきているパターンも一定数ある。一昨年前に助成採択者だった私道かびさんもその一人である。

そんなことを考えながら申請書類に目を通していく中で、「身体性を伴うものは美術分野であれ“パフォーマンスアート”として評価すべき」という考えに達した。そして、「身体性」という言葉にも様々な可能性がある。文字通りダンスやムーブメントとしての身体性もあれば、病気や子育て、障がいという身体性。他者との交流や対話も十分に身体性の範疇と言えるだろう。このAI台頭の時代に如何に自身の身体をフルに使うか…そういった個人の評価基準に基づき二次選考にのぞみ、最終的に4名の採択者が決まった。

結果として「舞台芸術」分野と名乗っている方は一人もいないわけであるが、詠春拳を用い横浜中華街の道場との交流を開拓しようとしている小林勇輝さんや、対話を考察し身体アーティストの活動を長きにわたって後押ししてきたAki Iwayaさんにはパフォーマンスアーティストとしての期待を寄せている。

藤原 徹平 (フジワラテツペイアーキテツラゴ代表、横浜国立大学大学院 Y-GSA 准教授)

審査に当たっては、アーティスト各自の独自性・ユニークネスへの理解と彼らのキャリアが今回の企画によって展開していけそうかという視点と、果たして横浜に新しい「状況の構築」をつくる動きに広がるのか、という観点から審査した。

「状況の構築」とは1960年代にシチュアシオニスト・インターナショナルが提示した概念で、簡単に言えば、都市や社会という遊離した存在を私たちの側に生きた存在として引き寄せてくる運動であり、またその企図そのものが一つの生きた構築の場になるかを問う視点である。

選ばれた4名のアーティスト達は、それぞれに個性的なキャリアがあるというだけでなく、横浜という存在を深掘りしていこうという探究の角度、視点の置き方が絶妙である点を高く評価している。横浜を深掘りと書いたが、私が4名から感じたのは、単に深く掘り下げるだけでなく、横浜という場所が持っている歴史や関係性の根っこを、深く深く掘ることによって、思いもよらない場所と跳躍的に繋いでいくような意思である。

例えば、あるアーティストは、中国の少林寺にルーツを持つ武術への関心から横浜の中華街のとあるコミュニティを発見し、その中に入り込むことを考えたが、同時にルーツである中国・少林寺にも身を置こうとする。自分の身体を通じて横浜の文化の距離を図るような目の覚めるような企画を描いてきた。

この企画において、自分たちの街の根を持つことと、軽やかに時代も国境も跳躍していくこと、一見矛盾する二つの運動が一つの身体に入り込む。

私には、矛盾した運動を身体に入れ込んでいくことを企図することは、この困難な時代に世界風景を描こうとする人にふさわしい態度に感じた。

横浜は370万人という巨大都市であり、近代日本が世界の文化に門戸を開いた港湾都市である。そして、アジアの物流人流の重要な結節点である。こうした大きな物語の中で、コミュニティの具体的な場所との間には、どうしても大きな距離があり、乖離が生まれる。

このACYアーティスト・フェローシップ助成というプログラムが、拠点との連携を条件にしているのは、アートにその両者の縫合を期待していることだと思うが、拠点は企画を展開するホワイトキューブなわけではなく、アーティストの身体的、生活的な実感を通じた横浜のビジョンの期待が先んじてあるべきだということを今回の審査を通じて改めて感じた。

帆足 亜紀 (横浜美術館 国際グループ 兼 学芸グループ グループ長横浜トリエンナーレ組織委員会事務局 総合ディレクター補佐)

今回初めてACYアーティスト・フェローシップ助成の審査に携わったが、120件超の申請書の内容は幅広く、申請書を読み通すのにかなりの時間を費やした。横浜の土地柄や歴史を活用したいというものから、横浜の環境がアーティストに開かれているからやってみようというものまで、実にさまざまな思いがその字面から伝わってきた。ひとことに横浜といっても、観光でよく知られる地域もあれば、田園風景のひろがる地域もある。また、国際都市といっても、貿易港として外でつながっている側面と多国籍なコミュニティが地域に根差している側面との両方にその国際性を見出すことができる。どの申請書にもこのような横浜にあって何ができるのかを一生懸命考えた足跡を確認することができた。同時にホストとなる横浜が申請者の期待にどこまで応えられるのか、試されているようにも感じた。

そのなかで二次選考に残られた方はみな、横浜の地の利をうまく生かすことをよく考えていた。また、横浜という場所と文化に誠実につきあってみようという姿勢が明確だった。今回は申請件数が多く、期せずしてたった4件の採択という狭き門となり、高水準の競争となったわけだが、助成金は作家/作品の優劣を競うためにあるのではなく、その作家の活動を助けて応援するためにある。このタイミングで横浜で活動することが、さらに次のステージへ進めるよいきっかけになるのではないかと感じた。今回の採択者はそんな期待を込めた人々だ。

横浜では横浜トリエンナーレという3年に1度の国際展を開催しているが、開催のたびに横浜で国際展を行う意味と意義を自問自答する。世界で起きていることにどのように応答していくのか。何をテーマに世界と対話をするのか。横浜に、あるいは、横浜で何ができるのか。ACYのアーティスト・フェローが見る横浜の風景からも何かヒントを得られるのではないかと感じる審査でもあった。